



黒点米の発生原因と対策

令和 5 年の稲作は全期間高温で、特に登熟期（出穂期から収穫期）は品質が低下する日平均気温 27℃以上で経過しました。そのため、白未熟粒（乳白粒、背白粒、腹白粒、基白粒など）が多く発生し、1 等米比率が大きく低下しました。さらに、同じく高温年に発生しやすい黒点米が各地で報告されています。今後も温暖化による高温が続くと思われるので、十分な対策を行い、高品質米生産に努めましょう。



写真 くさび状の黒変部を生じた着色粒

1. 黒点米とは？

- 1) 玄米表面にくさび状の黒変部を生じた着色粒（写真）。主に玄米の腹側に症状が出るが、まれに背側にも出る。くさび米、黒点症状米などとも呼ばれる。
- 2) イネシンガレセンチュウやイネアザミウマによる被害粒によく似ていて、外観での判別は難しいが、高温年で発生することや、発生が広い地域にみられることなどにより判断する。
- 3) コシヒカリをはじめ多くの品種で見られるが、「あきたこまち」や「ゆめひたち」で発生が多いと言われる。

2. 発生するメカニズムなど

- 1) 乳白粒などが多発するような高温年に発生しやすい。
- 2) 登熟初期（開花後 1～10 日）の水分ストレス（水分不足による機能の低下）により、玄米の表面にき裂ができ、それが拡大する過程で黒く変色して黒点米となる。
- 3) 水分ストレスは、水田の水が少ないだけでなく、高温年はモミの蒸散が多くなることにより起きやすくなる。

3. 対策

- 1) 作土の深さは 15cm 以上を目指す → 根が深く張ることにより、水分の吸収範囲が広がり、水分ストレスを受けにくくなる。養分（チッソやケイ酸など）の吸収も多くなる。
- 2) ケイ酸の施用 → 根からの水分の吸収力を高め、穂・モミへの水分供給量を多くする。また、モミからの蒸散を抑えて、水分損失を防ぐので水分ストレスを受けにくくする。土壌診断を行い、30 mg/100 g 以上を目標にケイ酸資材を施用する。
- 3) 穂肥の施用 → 基肥—穂肥体系では、穂肥を施用しないと黒点米の発生が多くなる。適切な穂肥（チッソ）施用は、根の吸水量を高め、水分ストレスを受けにくくする。全量基肥では基本的に穂肥は施用しない。
- 4) 根を健全にする水管理 → 中干しを行い、土の中の酸素を多くし、根を健全にすることにより、水分・養分の吸収する力を高める。中干し後は間断かん水とするが、イネが水分不足とならないように、水田の一部に水がなくなったら、すぐに入水する。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。